

# WISC-IV を用いた知的ギフテッドのアセスメントと 認知的特性の臨床的検討

小泉 雅彦<sup>1</sup>, 日高 茂暢<sup>2</sup>, 片桐 正敏<sup>3</sup>, 富永 大悟<sup>4</sup>, 室橋 春光<sup>5</sup>

A Clinical Study of WISC-IV Assessment  
and Cognitive Profile for Intellectual Gifted

Masahiko KOIZUMI, Motonobu HIDAKA, Masatoshi KATAGIRI,  
Daigo TOMINAGA, and Harumitsu MUROHASHI

## 要 旨

本論文の目的は、高い知的能力を持ちながら認知的なアンバランスから困り感を抱える知的ギフテッド判断における WISC-IV の有用性と知的機能の特性について検討した。対象は、第一著者が所属しているセンターに相談に来訪した32名（6～16歳）であり、指標のプロフィール、指標間のディスクレパンシー、内部相関について検討を行った。結果は、言語理解、知覚推理は非常に高い範囲にあり、ワーキングメモリーは平均の上、処理速度は平均に分類された。指標間のディスクレパンシー（ $\geq 23$ ）は VCI>WMI, VCI>PSI, PRI>PSI といった傾向が高頻度で見られた。下位検査においては「類似、単語、行列推理」が高得点であり、ギフテッドにおいて知能の中核である概念化や推理能力の高いことを示した。内部相関では、マニュアルにあるサンプルと比較して相関係数が低値であり、相関が見られなかった。これらの結果は、ギフテッド知的機能の特異性を示唆しており、ギフテッド群の子どもたちの特徴の抽出と判断に WISC-IV の使用が有用であることが確かめられた。

【キーワード】 知的ギフテッド, WISC-IV, ディスクレパンシー比較, 認知特性

【Key words】 Gifted, WISC-IV, Discrepancy Analysis, Cognitive Profile

## I. 目 的

教育現場では、高い知的能力を持ちながら認知的なアンバランスから困り感を抱える子どもたちが少なからず存在する。Webb (2019) は、「ギフテッド」は、知的能力全般、特定の学問領域、創造的思考、

<sup>1</sup> Gifted・LD 発達援助センター

<sup>2</sup> 佐賀大学 教育学部

<sup>3</sup> 北海道教育大学 教育学部

<sup>4</sup> 山梨学院大学 経営学部

<sup>5</sup> 札幌学院大学 心理学部

リーダーシップ, ビジュアル・アーツやパフォーマンス・アーツの5つの領域で1つあるいは複数並外れた能力を示すとし, 判断とともに多面的アプローチの必要性を述べている。ギフテッドの知的能力については, 多くの研究でウェクスラー式知能検査の全検査IQが130以上という基準を採用しており, 米国においても130以上というのがギフテッドの判定基準として採用されている州が多い (Worrell et al., 2019)。ギフテッドの定義に関しては, 専門家の間ではいまだに議論の分かれる問題であるが (Webb, 2019), 本論では「高い知的能力を持ちながら認知的なアンバランスから困り感を抱える子ども」を「知的ギフテッド」と定義する。

知的ギフテッドの子どもの中には, 優れた推理能力や問題解決能力を持っている反面, 読み書き計算の困難だけではなく感情の制御や対人関係の形成の困難, さらに感覚過敏や協調運動の脆弱性が見られる場合がある (小泉, 2018)。そのために, 学校において自己評価が低く, 不登校などの二次的な障害を引き起こしているケースが見られる (日高, 2020; 片桐ら, 2021; 小泉, 2016)。アメリカやイギリス, 韓国等の一部の国では, ギフテッドのもつアカデミック面のニーズや, 神経発達症を合併する2E (twice exceptional) の障害特性へのニーズに対して, 特別な教育的ニーズの対象と捉え教育が行われているものの (日高, 2020; 松村, 2016; 杉山, 2009), 日本ではギフテッドに関する, 支援はもちろんそのベースとなる定義や判断の検討がなされてこなかった。こうした現状に鑑み, 著者らは知的ギフテッドの子どもの相談を行ってきたが, その相談活動から得られた子どもたちの困難をまとめたものが Figure 1 である。

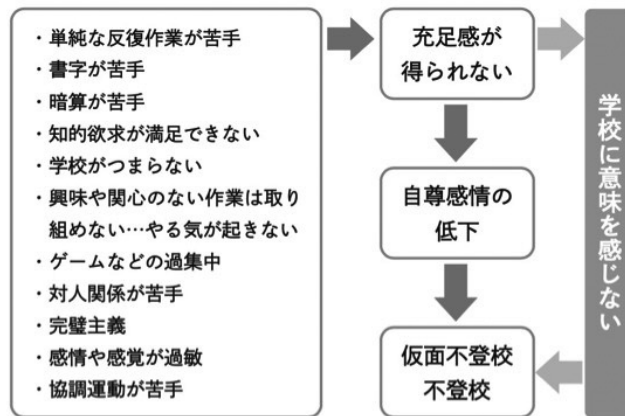


Figure 1. ギフテッドの子が抱える困難

(小泉, 2016, 図は片桐ら, 2021より許諾を得て引用)

近年日本において, 徐々にではあるがギフテッドの「才能」が注目されるようになってきた。教育研究の分野では, 2014年12月には, 東京大学先端科学技術研究センターの中邑賢龍教授が主宰する「異才発掘プロジェクト ROCKET (Room Of Children with Kokorozashi and Extraordinary Talents)」が動き出した。ROCKETはギフテッドや異才があることを診断したり, 優れた能力を開発したりするためのものではなく, 不登校など学校になじめないユニークな才能や興味をもつ子どもの新しい学びのあり方を提供する場として実施された。ROCKETでは, 特に, Project based learning (PBL) や Activity based learning (ABL) といった課題解決プロジェクトや体験を通じて学習するプログラムを提供された。才能を特定しないという観点から, ROCKETは松村 (2003) が指摘する広義の才能教育にあたると思われる。

しかし, ROCKETは才能を特定しないがユニークな才能や興味のある子どもを全国から選抜する矛盾したシステムであったこと, 「突き抜けた才能」や「志があり主体的で自ら能動的に学ぶ」といった要素

が強調されたことから、突き抜けなければならない、普通ではダメといった能力主義的な側面を帯びてしまった。そのため、中邑は2021年6月から能力主義に陥ったROCKETを発展的解消させ、新たにLEARNプロジェクトへと移行した。LEARNはLearn(学ぶ)Enthusiastically(熱心に)、Actively(積極的に)、Realistically(現実的に)、Naturally(自然に)の頭文字に由来し、「様々な壁にぶつかった子どもを既存の組織から離して、新しい環境の中で学ぶことを実現する」ことを目的としている。

ROCKETの影響が各所に及んでいる。公教育では、2017年9月には東大先端科学技術研究センターと渋谷区が提携し、ギフテッドにフォーカスを当てた教育を行っている。渋谷区では、小学校3年生から中学校3年生までの(1)特別支援教室拠点校の巡回指導教員による児童、(2)情緒障害等通級指導学級に在籍する児童、(3)長期欠席児童生徒を対象としプログラムを行っている(マイナビニュース, 2017)。さらに民間企業にもギフテッドの才能に注目し、2016年12月には孫正義が、高い志と異能を持つ若手人材支援を目的とし、孫正義育英財団を設立した。2019年から2度にわたりNHKクロースアップ現代において、「知られざる天才“ギフテッド”の素顔」が放映され、翌年にはNHK教育テレビジョンで「素顔のギフテッド」が放映され、少しずつギフテッドに対する関心が高まりつつある。

文部科学省においても中央教育審議会初等中等教育分科会(2020)の『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(中間まとめ)』の第2部第2章②補充的・発展的な学習指導において「特定分野に特異な才能を持つ児童生徒に対する指導について」の中で2Eについて触れている。さらに、2021年には「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議」が開かれ、日本においても定義や具体的な支援についての議論が緒についた。同年7月の有識者会議においては「特定分野に特異な才能のある児童生徒」の事例を募る等教育現場における支援状況の把握に努めており、ギフテッドや2Eの子どもの支援という課題が解消されるかは今後の議論に委ねられている。

ギフテッドにおける教育・支援の経験が少ない日本においては、臨床を積み上げていくことでギフテッド像に迫ることが必須の課題となってくる(片桐ら, 2021; 小泉, 2019)。日本では、ことギフテッドの「才能」に注目されがちだが、ギフテッドの子どもが抱える困難にもアプローチすることで、トータルな支援が可能となってくる。そのためにも、ギフテッドの定義と判断基準を明確にした上で、ギフテッドの臨床像に迫ることが求められる(林, 2017; 小泉, 2019)。

上記の点を踏まえ、本研究では、ギフテッド評価尺度(Gifted Rating Scale, GRS, Pfeiffer & Jarosewich, 2003)とともにギフテッドのアセスメントの一つとして用いられる日本版Wechsler Intelligence Scale for Children-Fourth Edition(以下、WISC-IV)知能検査を測定尺度とし、日本での知的ギフテッドのアセスメントにおけるWISC-IVの有用性について検討を加えるとともに、知的機能の特性について同定を試みる。

## Ⅱ. 方 法

(1) 操作的定義: 知的ギフテッドの判断に際し、WISC-IVの全検査IQ(Full scale IQ, FSIQ)、または一般知的能力指標(General ability index, GAI)  $\geq 130$ の基準を満たしているケースを本研究の対象とした。

(2) 研究参加者: 操作定義に従い分類し、ギフテッド・LD発達援助センターの相談事例(以下、知的ギフテッド群)32名(男子24名、女子8名)、平均9.71歳( $\pm 2.6$ 歳)を対象とした。

(3) 分析方法: 言語理解指標(Verbal comprehension index, VCI)、知覚推理指標(Perceptual reasoning index, PRI)、ワーキングメモリー指標(Working memory index, WMI)、処理速度指標(Processing speed

index, PSI) の4つの合成得点と, GAI および認知熟達度指標 (Cognitive Proficiency Index, CPI) と指標間のディスクレパンシー及び10の下位検査について, 記述統計およびピアソンの積率相関係数を求め, 無相関検定を実施した。指標間のディスクレパンシーに関しては, Flanagan and Kaufman (2014) にもとづき, 合成得点が23ポイント (1.5標準偏差) 以上の差がある場合統計的に有意な差があると判断し, ディスクレパンシーありとした。なお, 分析には統計ソフト JASP (JASP team, 2021) を用いた。

### Ⅲ. 結 果

#### (1) 知的ギフテッド群の WISC-IV プロフィールと下位検査

本研究における知的ギフテッド群の合成得点の記述統計結果を Table 1 に示す。日本版 WISC-IV 理論・解釈マニュアルにある知的ギフテッドのデータ (以下, マニュアル群) と比較すると, 本研究の知的ギフテッド群は, FSIQ, VCI, PRI においてマニュアル群データより 1 標準偏差程度高い得点を有していた。またアメリカギフテッド協会 (National Association for Gifted Children, NAGC) の知的ギフテッドのデータ (以下, NAGC 群, Zhu et al., 2008) と同様に, VCI と PRI が130を越え, VCI, PRI と比較し WMI と PSI が低値になることが示された。また記述分類では, 知的ギフテッド群は FSIQ, VCI, PRI, GAI が「非常に高い」の範囲に位置し, WMI と CPI は「平均の上」, PSI は「平均」の範囲に位置した。

下位検査の結果は, Table 2 に示す。本研究の知的ギフテッド群で高得点の上位3位であった「類似, 単語, 行列推理」は NAGC 群のデータと, 低得点の下位3位であった「数唱, 符号, 記号探し」はマニ

Table 1. 本研究の知的ギフテッド群の WISC-IV プロフィール

	FSIQ	VCI	PRI	WMI	PSI	GAI	CPI
<i>Mean</i> (N = 32)	130.8	136.8	130.1	114.7	104.0	139.3	110.5
<i>SD</i>	7.6	12.5	8.8	13.0	16.0	7.4	12.5
<i>Median</i>	130	137	132	115	104	138	110
<i>Minimum</i>	116	107	115	79	73	124	85
<i>Maximum</i>	145	155	149	141	135	155	132
マニュアル群 (N = 59-63)	123.5	124.7	120.4	112.5	110.6	—	—
NAGC 群 (N = 156-157)	134.0	134.9	130.1	123.9	114.3	139.2	—

注) FSIQ: 全検査 IQ, VCI: 言語理解指標, PRI: 知覚推理指標, WMI: ワーキングメモリー指標, PSI: 処理速度指標, GAI: 一般知的能力指標, CPI: 認知熟達度指標, マニュアル群: 日本版 WISC-IV 理論・解釈マニュアルより引用, NAGC 群: Zhu et al., 2008より引用

Table 2. 本研究の知的ギフテッド群の WISC-IV 下位検査

	類似	単語	理解	積木模様	絵の概念	行列推理	数唱	語音整列	符号	記号探し
<i>Mean</i> (N = 32)	16.8	16.6	14.9	14.3	13.5	15.4	12.4	12.7	10.1	11.4
<i>SD</i>	2.5	2.8	2.6	1.9	2.6	2.5	2.9	3.1	3.3	3.3
<i>Median</i>	17	17	15	14	13	16	12	13	10	11
<i>Minimum</i>	9	10	7	9	7	10	7	4	3	7
<i>Maximum</i>	19	19	19	19	19	19	19	19	18	19
マニュアル群 (N = 61-63)	14.1	14.6	14.1	13.8	12.7	13.4	12.0	2.6	11.5	12.1
NAGC 群 (N = 153-155)	16.6	16.1	15.5	14.1	15.3	15.7	13.5	15.2	11.8	13.0

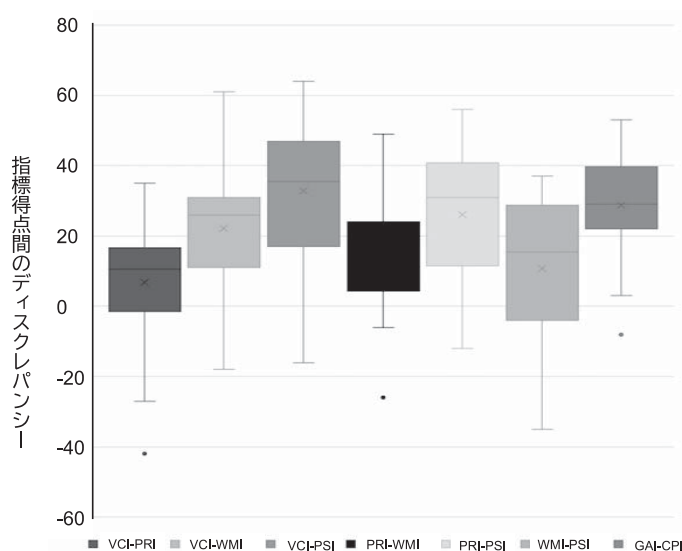
注) マニュアル群: 日本版 WISC-IV 理論・解釈マニュアルより引用, NAGC 群: Zhu et al., 2008より引用

アル群と類似の結果であった。高得点の「類似, 単語, 行列推理」の平均評価点は16.3であり, 低得点の「数唱, 符号, 記号探し」の平均評価点の11.3との差は5点であった。

## (2) 知的ギフトッド群における指標得点間のディスクレパンシー分析

本研究の知的ギフトッド群から得られた4つの指標得点間及びGAIとCPIのディスクレパンシーを示したのがFigure 2である。指標間で合成得点23以上のディスクレパンシーが見られたケースが, VCIとPSIで68.8%, PRIとPSIでは59.3%, VCIとWMIでは59.3%であった。特にVCIとPRI, PRIとWMIを比較すると差が小さい傾向が見られた一方, VCIとPSI, PRIとPSIではプラス方向に大きなディスクレパンシーがあり, PSIよりもVCI, PRIが高い結果を示した。

同様にGAIとCPIでディスクレパンシーが見られたのが32ケース中22ケース(69.0%)であった。GAIとCPIの差の平均は28.8ポイントであり, ディスクレパンシーの標準出現率は1.8-2.8の間であった。



注) VCI: 言語理解指標, PRI: 知覚推理指標, WMI: ワーキングメモリー指標, PSI: 処理速度指標, GAI: 一般知的能力指標, CPI: 認知熟達度指標

Figure 2. 本研究の知的ギフトッド群に見られる指標得点間のディスクレパンシー

さらに本研究の知的ギフトッド群において, 指標得点間に23ポイント以上のディスクレパンシーが見られた項目数を検討した。知的ギフトッド群では複数のディスクレパンシーが見られることが多く, これを「ディスクレパンシーの重なり」と表現する。ディスクレパンシーの重なりをFigure 3に示す。3つ以上のディスクレパンシーを抱えるケースが, 32ケース中19ケース(59.4%)に及んだ。

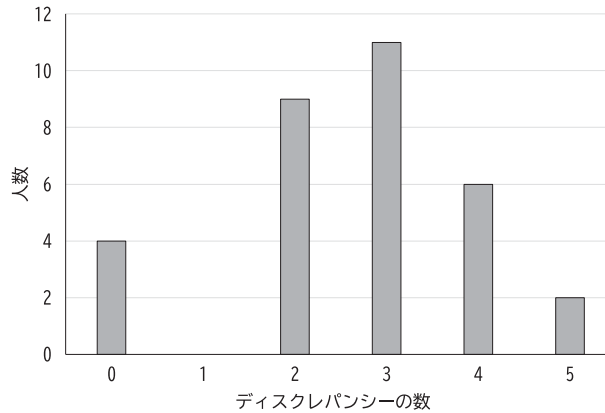


Figure 3. 本研究の知的ギフテッド群に見られたディスクレパンシーの重なり

### (3) 知的ギフテッド群における WISC-IV の内部相関

本研究で得られた知的ギフテッド群のそれぞれの合成得点および下位検査の評価点について相関分析を行った (Table 3)。FSIQ と各指標との間において、VCI ( $r=.65$ ), WMI ( $r=.64$ ), PSI ( $r=.59$ ) と大きな効果量と有意な相関が見られたが (全て  $p<.001$ ), FSIQ と PRI 間では相関が見られなかった ( $p=.40$ )。さらに、全ての指標において、日本版 WISC-IV の全年齢群内部相関と比べると低い効果量となった。

各指標の合成得点とそれを構成する下位検査の相関を見ると、VCI は類似 ( $r=.63$ ), 単語 ( $r=.76$ ), 理解 ( $r=.68$ ), WMI は数唱 ( $r=.75$ ), 語音整列 ( $r=.78$ ), PSI は符号 ( $r=.86$ ), 記号探し ( $r=.85$ ) と、それぞれの合成得点と下位検査評価点の間に大きな効果量と有意な相関が見られた (全て  $p<.001$ )。

Table 3. 本研究における知的ギフテッド群の合成得点, および下位検査評価点の内部相関

	FSIQ	VCI	PRI	WMI	PSI	GAI	CPI	類似	単語	理解	積木	概念	行列	数唱	語音	符号	記号
FSIQ	-																
VCI	.65***	-															
PRI	.15	-.10	-														
WMI	.64	.29	-.05	-													
PSI	.59***	.02	-.12	.18	-												
GAI	.59***	.74***	.52***	.15	-.05	-											
CPI	.75***	.17	-.14	.54***	.85***	.03	-										
類似	.35**	.63***	-.28	.12	.05	.36*	.14	-									
単語	.48**	.76***	-.03	.28	-.10	.61***	.05	.28	-								
理解	.47**	.68***	.03	.17	.06	.54**	.13	.10	.30	-							
積木	-.07	-.32	.23	.28	-.14	-.12	-.03	-.18	.04	-.60***	-						
概念	.13	.04	.47***	-.21	.13	.30	<.01	.05	-.31	.32	-.36*	-					
行列	.18	.03	.65***	.01	-.06	.50**	-.03	-.34	.26	.12	<.01	-.03	-				
数唱	.35*	.07	-.14	.75***	.10	-.08	.38*	-.02	.02	.09	.25	-.21	-.02	-			
語音	.60***	.34	.04	.78***	.17	.27	.46**	.21	.37*	.14	.20	-.11	.01	.18	-		
符号	.57***	-.01	.05	.20	.86***	.05	.76***	.01	-.07	.03	-.09	-.02	.21	.14	.18	-	
記号	.47**	.06	-.15	.05	.85***	-.06	.65***	.07	-.10	.11	-.24	.22	-.24	-.08	.14	.61***	-

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

注) FSIQ: 全検査 IQ, VCI: 言語理解指標, PRI: 知覚推理指標, WMI: ワーキングメモリー指標, PSI: 処理速度指標, GAI: 一般知的能力指標, CPI: 認知熟達度指標

しかし、PRI と下位検査評価点の間には、絵の概念 ( $r=.47$ )、行列推理 ( $r=.65$ ) との間に有意な相関 (それぞれ  $p<.001$ ) が見られた一方、積木模様 ( $r=.23$ ) との間には有意な相関は認められなかった ( $p=.20$ )。

また下位検査間で有意な相関が見られたのは、「単語」と「語音整列」( $r=.37$ ,  $p<.05$ )、「理解」と「積木模様」( $r=-.60$ ,  $p<.001$ )、「積木模様」と「絵の概念」( $r=-.36$ ,  $p<.05$ )、「符号」と「記号探し」( $r=.61$ ,  $p<.001$ ) であった。

## IV. 考 察

### (1) 知的ギフテッドのアセスメントにおける WISC-IV の有用性

本研究では、知的ギフテッドの WISC-IV プロフィールとして「非常に高い VCI と PRI」, 「平均の上の WMI」, 「平均の PSI」という結果が得られた。先行研究が示している PSI と WMI の得点が VCI や PRI に比べて有意に低い (Flanagan & Kaufman, 2014) という知的ギフテッドの特徴的なプロフィールと一致する結果であった。WISC-IV の結果を個別にみると、WMI と PSI 両指標が VCI, PRI と同程度の結果を示した事例はわずか 1 例であり、多くは WMI あるいは PSI のどちらかが VCI, PSI より低かった。従って、本研究でも改めて示された 4 指標のプロフィール特徴は、知的ギフテッド群を判断する上での一つの指針となると考えられる。

下位検査においては、「類似、単語、行列推理」の高得点は、類推能力や豊富な語彙量を反映しており、知的ギフテッドの高い能力を示唆している。低得点の「数唱、符号、記号探し」は、素早い作業や鉛筆を使った作業の苦手だけではなく短期記憶や注意の弱さを反映しており、これらの下位検査のプロフィールが知的ギフテッドを識別する上で一つの目安となると考えられる。

また GAI と CPI の合成得点の差が 23 ポイント以上 (1.5SD) あれば、知的ギフテッドの判定の際には FSIQ ではなく GAI を用いるべきであると Flanagan and Kaufman (2014) は述べている。本研究の知的ギフテッド群においても、GAI と CPI の差が有意に大きいケースが 69% と多いことから、知的ギフテッドの判断においては GAI の適用が有用であると考えられる。

さらに小泉 (2015) は、非常に高い GAI と平均的な CPI が知的ギフテッドの特徴と述べているが、本研究からもう 1 つの特徴が考えられる。それは指標間の著しいディスクレパンシーの多さである。本研究から著しいディスクレパンシーが 3 項目以上重なるケースが 59% と多かった。著しいディスクレパンシーの重なりという視点も、知的ギフテッドのアセスメントにおいて一つの判断指針となると考える。

### (2) ギフテッドの知的特性

Flanagan and Kaufman (2014) は、知的ギフテッドは概念に基づいた下位検査の得点が高く、知識を蓄積したり操作したりする能力に優れていると指摘している。「類似、単語、行列推理」における高い評価点は、知的ギフテッドの優れた概念化、高次思考や推論を反映していると考えられる。

知的ギフテッドの子どもは、検査に対しては完璧主義と相まって正答にたどり着くためには労力を惜しまない。検査時の行動観察を通して特徴的なのは、「絵の概念」や「行列推理」では、問題が難しくなると直感モードから熟考モードへと切り替わることである。課題に対して、柔軟にリソースを割いていると考えられる。

PRI の流動性推理を測定する下位検査については、言語を操作しながら推論しているケースが多く見られた。

### (3) 特異的な知的構造の可能性

本来 WISC-IV の指標および下位検査評価点との間には、正の相関がある (Flanagan & Kaufman, 2014)。しかし、本研究の知的ギフテッド群においては、Molinero et al. (2015) の研究と同様にマニュアルと比較して相関係数が低かったり、相関が見られなかったりした項目が確認された。さらに、本来、指標を測定する下位検査間においては高い相関が見られる。しかし、PRI と WMI、それぞれの指標における下位検査間においては相関が見られなかった。これらの結果は、ギフテッドの知的機能が通常とは質的に異なる可能性を示唆している。現在、著者らは主成分分析や探索的因子分析を用いて検討中であるが、より大規模に知的ギフテッドにおける知能の因子構造にフォーカスを当てた研究が求められる。

### (4) 本研究の限界

本研究は臨床活動の一環で協力を得られた参加者を対象としているため、サンプルサイズの少なさは否定できない。また本研究に参加した知的ギフテッドは、何らかの困り感を持ち相談に来ている事例に限定される。そのため、現時点で特段の支援を受けなくても社会生活に適応している知的ギフテッドは含まれていない点にも留意する必要がある。

## V. 終わりに

ギフテッドは常に「才能」に注目が集まり、ギフテッドの抱える「困り感」が置き去りにされている感が否めない。今回の結果では、知的ギフテッド群の知的機能における優れた部分と苦手な部分について明らかにすることができた。それらを模式的に図示したのが Figure 4 である。出力の大きい、得意な領域で飛行している時には安定し能力を最大限発揮できるが、平均的な出力で飛んでいる時には、出力の大きいエンジンは能力を持て余し、時には不完全燃焼の状態に陥る。知的ギフテッドは、安定した飛行と不安定な飛行を常に繰り返している。

知的ギフテッドの日常生活などでの困難の背景には、平均的な WMI や PSI だけではなく、著しい指標間のディスクレパンシーとその差の重なるの多さが困難をより重篤にしていると考えられる。こうした知的能力のアンバランスさは、知的ギフテッドの判断とともに支援のポイントにもなってくるだろう。



Figure 4. エンジンの大きさ出力がバラバラなジェット機  
(片桐ら, 2021より許諾を得て引用)

ある知的ギフテッドの子どもは、「テストの時は暇なんだ。自分の脳はいくつかに分かれていて、一つがテストを解いているけれど、他の部分が暇なんだ」と語ってくれた。この話は、まさしくニューロダイバーシティ、脳の多様性を窺わせる。知的ギフテッドは、通常と異なる知的機能の構造を持っているのか



もしれない。日本におけるギフテッド研究は緒についたばかりであり、この先、彼ら／彼女らの知的構造を明らかにし、知能の多様性に応じた研究と支援が求められる。

### 倫理的配慮

本研究は第2著者の所属機関の研究倫理審査委員会の審査、承認を得て実施された。特に個人情報および倫理面に配慮し行われた。また相談及び調査段階で発表の掲載について保護者の同意を得ている。

### 付 記

本研究にご協力して頂いた知的ギフテッドの子ども達と保護者の皆さまに感謝いたします。また本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号19K02935, 研究代表者: 日高茂暢, 「高い知能をもつ人が示す過度激動特性(刺激への感受性の強さ)に関する尺度開発」)の助成を受けた。

### 引用文献

- Flanagan, D.P. & Kaufman, A. S. 上野一彦 監訳 (2014) エッセンシャルズ WISC-IVによる心理アセスメント. 日本文化科学社.
- 林睦 (2017) ギフテッドの概念と日本における教育の可能性. 滋賀大学教育学部紀要, 67, 199-204.
- 日高茂暢 (2020) 知的ギフテッドの子どもの持つ特別な教育的ニーズの理解—特別支援教育の「個に応じた学習」を用いたインクルーシブな才能教育. 佐賀大学教育学部研究論文集, 4-1147-161.
- JASP Team (2021). JASP (Version 0.15) [Computer software].
- 片桐正敏・小泉雅彦・日高茂暢・富永大悟・ギフテッド応援隊・樋戸ひかる (2021) ギフテッドの個性を知り、伸ばす方法. 小学館.
- 小泉雅彦 (2014) 読み書き困難を持つ知的ギフテッドの支援. 子ども発達臨床研究, 6, 131-136.
- 小泉雅彦 (2015) 認知機能にアンバランスを抱えるこどもの「生きづらさ」と教育:—WISC-IV で高い一般知的能力指標を示す知的ギフテッド群—. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 124, 145-151.
- 小泉雅彦・片桐正敏・室橋春光 (2018) 知的ギフテッド群の子どもの認知特性と抱える困難について. 日本LD学会第27回大会発表論文集, P2-28.
- 小泉雅彦 (2019) 学習に困り感を抱える子どもを支える～土曜教室の成果からギフテッド支援を考える～. 札幌学院大学心理学紀要, 2 (1), 29-36.
- マイナビニュース (2017) 「渋谷区で動き出したギフテッド教育. 協働する東大先端研と区長の思い」 <https://news.mynavi.jp/article/20170905-a018/> (2021年12月10日閲覧)
- 松村暢隆. (2003). アメリカの才能教育—多様な学習ニーズに応える特別支援—. 東信堂.
- 松村暢隆. (2016). アメリカの2E教育の新たな枠組—隠された才能・障害ニーズの識別と支援—. 關西大學文學論集, 66 (3), 143-171.
- Molinero, C., Mata, S., Calero, M.D., Garcia-Martín, M.B. & Araque-Cuenca, A. (2015). Usefulness of WISC-IV in determining intellectual giftedness. The Spanish Journal of Psychology, 18, 1-10.
- 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会 (2020) 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～(中間まとめ)』. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1382996\\_00006.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1382996_00006.htm) (12月10日閲覧)
- 文部科学省 (2021) 特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/169/index.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/169/index.html) (12月10日閲覧)
- National Association for Gifted Children. (2008). Use of the WISC-IV for Gifted. Retrieved from <http://nagc.org>
- NHK (2019) クロスアップ現代「知られざる天才“ギフテッド”の素顔」 <https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4320/index.html> (12月10日閲覧)

- NHK (2020) NHK 教育テレビジョン「素顔のギフテッド」<https://www.nhk-ondemand.jp/program/P202000206900000/> (12月10日閲覧)
- Pfeiffer SI. Challenges and opportunities for students who are gifted: What the experts say. *Gifted Child Quarterly*. 2003;47:161-169.
- 孫正義育英財団ホームページ (2016). <https://masason-foundation.org> (2021年12月10日閲覧)
- 杉山登志郎・岡 南・小倉正義 (2009) ギフテッド天才の育て方. 学研教育出版
- 東京大学先端科学技術センター・日本財団 (2014) 異才発掘プロジェクト ROCKET. <https://rocket.tokyo/> (2021年12月10日閲覧)
- 東京大学先端科学技術センター (2021) LEARN プロジェクト. <https://learn-project.com/> (12月10日閲覧)
- Webb, J., T., Gore, J., L., Amend, E., R., & Devries, A., R., 角谷詩織・榊原洋一 監訳 (2019) ギフティッド その誤診と重複診断：心理・医療・教育の現場から. 北大路書房
- Wechsler, D. 日本版 WISC-IV 刊行委員会 翻訳 (2010) 日本版 WISC-IV理論・解釈マニュアル. 日本文化科学社.
- Worrell, F.C., Subotnik, R.F., Olszewski-Kubilius, P., & Dixson, D.D. (2019). Gifted Students. *Annual Review of Psychology*, 70, 551-176.
- Zhu, J., Cayton, T., Weiss, L., & Gabel, A. (2008). WISC-IV Technical report #7. The WISC-IV extended norms were developed in response to a request from the National Association